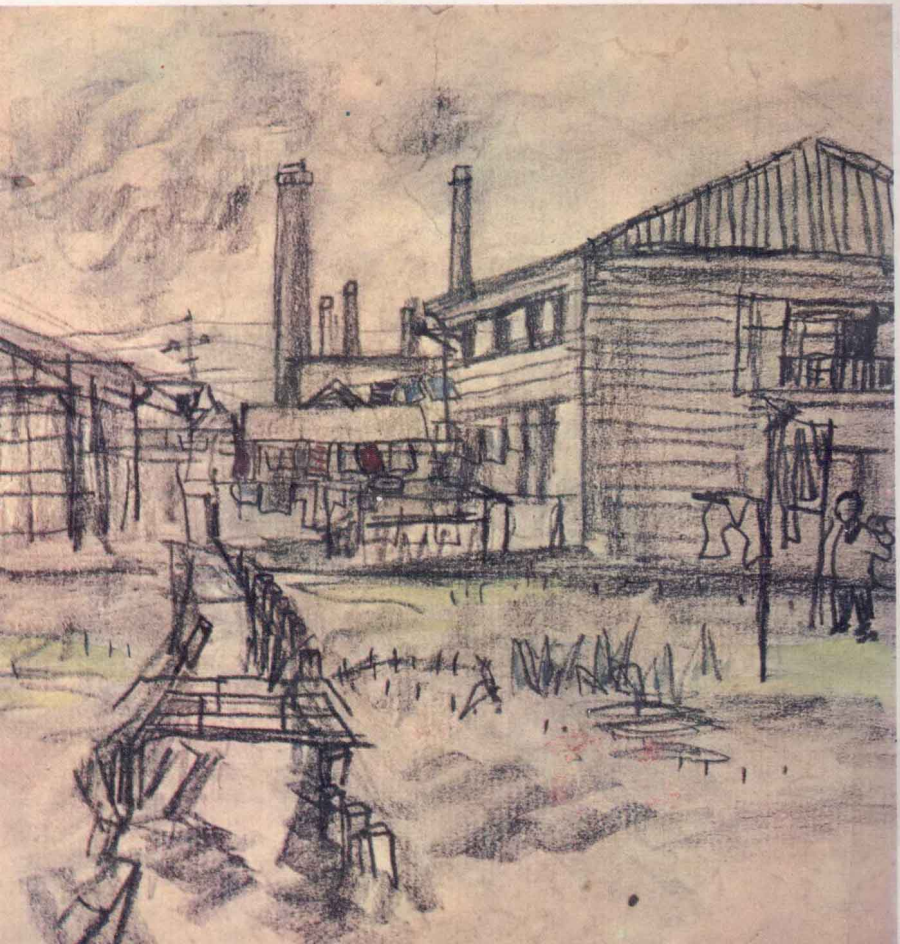
早乙女勝元
小説選集

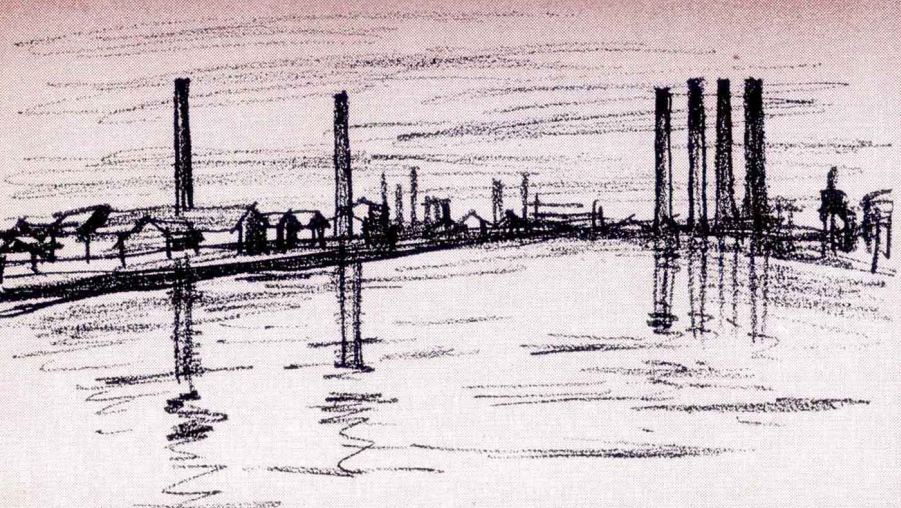
9

青春の歯車

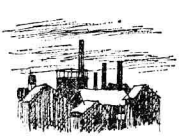


9

青春の歯車



早乙女勝元小説選集・9
青春の歯車
1965・初版
作者　早乙女勝元©
画家　久米宏一



制作　小宮山量平
発行　山村光司
株式会社　理論社
東京都新宿区若松町一〇四
電話　〇三(203)五七九一
振替　東京九—九五七三六
B6判　336P　0393—90909—8924
一九七九年　八月第三刷

もくじ

第1章・ムカムカクサクサ／3
第2章・思いなやみ／75
第3章・檻（おり）を出てまた檻の中へ／141
第4章・まかしとき！／201
第5章・ひげの挑戦／271
てのひら自叙伝〈9〉／333

そうてい・カット／久米宏一

おことわり

通称〈ダンプの鉄〉とよばれるわが主人公は、最初は、実は〈雷(いかずち)〉というあだ名で通っていたのです。ですから、一九六四年、この小説が民主青年新聞に連載されたときの題名は、「おれは雷」でした。

こんど、一本にまとめるにあたって、大はばに改作の手をくわえ、新しく登場人物のイメージを掘りさげていくうちに、この〈雷〉が、どうも雷らしくなくなってしまいました。それで、この長編は「青春の歯車」と変ったのです。

作者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第1章／ムカムカクサクサ

1

「あら！」

おさげ髪のカツ子の悲鳴だ。

彼女は、朝食のハシを宙にとめて、押しいれのほうへ首をふりむけるなり、黄色い声をはりあげたものである。

「熊ちゃんたら、今朝は、ばかに早いわね。どしたんだろ？」

このおどろきは、カツ子だけにとどまらなかった。弟の豊から長男の健一へ、健一から両親の頬をよぎって、またたくまに六畳一間いっぱいにふくれあがった。

いつも出勤時間すれすれにとびだしてくるはずの鉄男が、今朝にかぎって、まだみなの食事中に、押しいれからぬっと、そのいかつい顔をのぞかせたのである。こんなことは、めったにないことだった。みながおどろくのも無理はない。

「てやんでえ」

一同の視線をあびて、てれくさそうに目をしばだてた鉄男の表情には、いつになく動きがある。だが、ひげだらけのむさくるしい顔だった。ばっさりさかだった頭髪の下で、二つの目がぎょろりとむきだし、陽にやけたアズキ色の頬は、意欲的にひきしまっている。手足は長い。よぶんな肉こそついてなかったが、汗と脂にまみれたシャツは上半身につっぱって、肩と胸の筋肉がぐりぐりっと動物的にむくれあがる。

石川家では、畳の絶対数がたりないので、鉄男は、いつも押しいれに寝ることになっていた。

少々せまくて、むさくるしいが、手足をのばしても、まさか壁をぶちぬくようなことはないから、かえって気楽だと鉄男はいうのだ。気楽なのは当人の勝手だが、一度眠りにおちたらさいご、これを起すことは、なみたいていのことではなかった。戸をたたいても、ふとんをひんめくっても、そのくらいのことではびくともしない。ついには、カツ子が兄の両足をもって、押しいれからひきずりだすことになるのだが、その鉄男が、今朝にかぎって、一人でむくむくと出てきたものだから、みなおどろいたのである。

「かあちゃん、気をつけて。この分じゃ雨がふるかもしれないよ」

これは、カツ子の皮肉だ。
「雨？」
鉄男は、窓の外を見、にたっと頬をゆがめて、
「冗談じゃねえや。みろ、オテント様は、ぴかぴかどんどん輝いてるじゃねえか。雨がふったら、落下傘も台なしだい」
「落下傘？」
「ま、いい。こっちの話だ」
「なによ、落下傘って？」
「や、いかん、もう七時半ときたか」
「――いやあねえ」
カツ子は、そのときちんまりとした鼻をうごめかして、口をきゅっとへの字にむすんだ。
「なんだ？」
と、ふりかえったのは、兄の健一。
かれは、玄関のあがりがまちにすわって、ブラシで靴をみがいている。いつも、そのくらいのゆとりを持っている男だ。
「今、ぶーんとにおってきたと思ったら、熊のにおいなの！　ああ、幻滅だ。ナットウがくさったみたい……」
「馬鹿。大げさなことをいうな！」
鉄男は一声あびせて、あわただしくベルトの金具を鳴らし、煮しめたような皮ジャンパーに腕を通す。
「なんだ。めしも食わずにか？」
父の雄助が、これまた作業服のボタンをとめながら、目をむけた。
「父ちゃん、自分の手もとを見ろい。ボタンちゅうもんは、一つかけちがえると、みんなおかしくなっちゃうんだ。おれも、ま、そんなところかな」
「おまえ」
母は、いささか不安げに、
「工場へいくんだろうね？　工場へ？」
「へへっ、遊びにいきたいのは、やまやまなれど、とにもかくにも先だつものがなしと……」
鉄男は、ぱちんと指をはじいて、土間におりるより早く、どろまみれの長靴で表へとびだした。ここから紺青の空が、帯のように長くくねって見える。はすむかいの木造アパートが太陽をふさいでいるのだ。それでも、アパートの二階にひるがえるおしめに、陽の光がチカチカはずんで風にゆれている。快晴、まさに落下傘びよりだ。

しめた――とうなずき、どぶ板をふんで、そのまま一散に路地へつきぬけようとした長靴が、ふいと釘づけになった。

健一だ。すぐ目の前に立っている。

ダークグリーンの背広に、袖口から出たYシャツの白さが、にくいほどあざやかにきわだっている。靴はみがきぬかれて、きのう買った品物のように光っている。どろだらけの雨靴とは、いかにも対照的だった。それがまた、この兄弟の性格のちがいをあらわしているともいえる。なんとも、皮肉なくみあわせだった。これでは、だれが見ても、おなじ工場の、おなじ現場にはたらく二人だとは思えないだろう。

「おい、どこへいくんだ、顔も洗わずに？」

メガネのレンズごしに、健一の目が、鋭く鉄男をとらえてはなさない。

「おッ、こわいこわい！」

鉄男は、ぷいと視線をひっぺがして、

「それよか、兄きよ。なにもそうあわてくさって、一番乗りで工場へすっとんでいくこともないじゃないか。喜ぶのは、せいぜいが〈山手線〉ぐらいなもんだろ？」

「山手線って、なんだ、金丸職長のことか？　職長だって人間だ。別にどうってことはない。おれは、上役の目など意識しちゃいないからな」

健一は、よどみなくつづけた。

「人間、どうせ、はたらかなきゃなんないものなら、できるだけ気分よく仕事をしたいな。それのほうがさっぱりするし、精神衛生にもいいはずだ」

「ごもっとも」

「仕事は仕事。おれは、そうわりきっているんだ」

「ごもっとも」

「なんだ、おまえの、そのいいかたは？」

「兄きのいいたいことはわかるけんどよう。なにもかも、そうぴっしゃりとわりきれるもんなら、人生苦労はねえやな」

「どういうことだ？」

「だってよう。あの工場、気分よくさっぱりと仕事のできるようなところかよ。鼻くそみたいな給料で、ワッサワッサあおられてよ、兄きだって、給料日には、いいかげんげそっとしてるじゃねえか。それにこのごろは〈山手線〉ばかし、ひっきりなしにまわってきやがって、ま

るっきり息つぐひまもねえや。だからよ、ちょっとゴミ箱をのぞいてみな。サモン、セデス、アスパラ、グロンサン、リポビタンD……と、いろんなアンプルのかけらが、ごってりこんと捨ててあらあ！」

たまったもんじゃねえや、と、機銃弾みたいにまくしたてて、鉄男は、あっさり健一の存在を無視した。健一を、そこにおきざりにしたまま、肩で風をきって、大またに路地をつきぬける。道は、そこで二股にわかれる。

いつものコースとは逆に、工場へむかう道には尻をむけて、どろだらけの長靴は、ずんずんと荒っぽく進んだ。

「ひょう！」

背後から自転車でやってきて、すれちがいざま、鉄男の肩をたたいたのは、三郎だ。これも、鉄男とおなじ山崎製作所の機械場にいるが、自称伊達男を自慢するだけあって、身のこなしも軽くて精悍、シャツのえりもとに、ペンダントなどのぞかせている。それでいて、さほどきざではない。シャレが、身についているのだ。

「ちえッ、おめえときたら、のろまっちいな、まったく！」

と、目をいからす三郎をなだめて、鉄男は、走りながら、自転車の荷台へとびのった。もはや、いいわけなどしているゆとりはないのだ。自転車は、ぐらり一揺れしたが、浮いたペダルを思いきりふみこんだ三郎は、たくみに腰をあやつって、みるみるスピードをあげた。

「急げ、急げ、あと三分だ」

「早いとこ、早いとこ」

二人をのせた自転車は、いまにも分解しそうな勢いで、キュンキュンときしみながら、全速力で突っ走る。道はせまい。両がわにひしめいたマッチ箱のような家なみが、みるみる背後へすいこまれていく。

それでも、さすがに朝だった。

昼ひなかは、騒音と振動、スモッグにあえぎのたうつ町も、この瞬間の透明な空気をむさぼるかのように、いまイキイキとはずんでいる。太陽は、黒い屋根と屋根のかさなりの上にきらめき、いっぱいにあふれて、道にまでこぼれおちそうにも見える。その光と熱を、ビニール袋にでもつめて、工場へ持っていきたいぐらいだ。空気のカンヅメ……そんなものがあったら、けっこう売れるだろう。なぜなら、この朝のひとときは短い。まがりくねった道のむこうに、無数の煙突群がそそりたち、すで

に色とりどりの煙をはきだしている。あいつのおかげで、透明な空気は、あっというまに、汚染される宿命にあるのだ。

自転車は、その煙にむかって走る。

道を急ぐ男女のあいだをくぐりぬけ、かきわけて、チリチリと鈴を鳴らしながら、全速力で走る。道の先の無人の踏みきりで警報器がしきりと音をたてている。三郎と鉄男をのせた自転車は、その踏みきりを一息にとびこえて、タバコ屋のかどで急カーブをきった。ここまできたら、雑踏は消える。人通りのない道をまた一直線に走る。

「ここだ！」

と、三郎が、ブレーキをきしませたのは、赤さびた貨物線のガード下。

「まにあったか？」

鉄男は、なによりも、それが気になってしかたない。

「へっへへへへ……、おまかせあれって。たっぷりと、何種類もの落下傘がお目にかかれらあ。——あ、くるくる！」

「え、もう？」

鉄男は、びくんと顔をあげて、頭上のガードを見上げた。

三郎の耳は、動物のように鋭かった。石垣の上の、ひときわ高い軌道から、ふってわいたように娘たちの朝の声がひびいてきたのである。笑い声もまじって、それこそ小鳥のさえずりのようだ。下の道が工事中なので、手っとりばやく、ガードの枕木の上をわたっていく娘たちの数と、その通過時刻とをどこからかつかんできたのは、この三郎だった。賭けに破れて、ついに口をわったとっておきの情報なのだ。娘たちの数は三人、三人とも、この町の毛織工場へかよう娘たち——と、三郎の情報は、なかなかくわしい。もちろん、彼女たちはスカートだ。それも、いまはやりのフレーヤーとかいう、すそのひろがったやつだ。だから、枕木と枕木とのあいだから、その〈落下傘〉が、ゆっくりと拝見できるというわけである。

「へへっ、きやがった！」

「さ、お早く！」

二人は、自転車のチェーンでもなおすふりをよそおって、ガードの真下にしゃがみこんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

後輪のスポークごしに、三郎は歯ぐきをむきだしにして笑い、オイ、どうでえと、手をのばして、鉄男のひざをこづいた。鉄男は、髪をさかだて、ぐっぐっと、のどをおしころして笑った。ニキビだらけの頬の筋肉がだらしなくたるんで、しまりのない笑いが、のどぼとけまで大きくゆすりあげる。だが、声をたてずに笑うのは、あまり楽ではない。脇腹がよじれて、ぐぐっと涙が出てくるのだ。

娘たちの足音は、確実に接近してくる。

なにをしゃべっているのか、笑い声がかん高くはずんで、ぴちぴちと耳たぶをくすぐるかのようだ。と、思うまもなく、ガードがにぶく鳴った。足音だ。娘たちは、真下にひそんでいる男どもに気づくことなく、スカートをひるがえして、大たんにも枕木をふんでくる……。

と、三郎が、片目をつむった。

それが、合図だった。

鉄男は、笑いをかみころし、むきだした目の玉を、勢いよく空中へふりあげた。あッと、息をのんだ。これはまた、どうしたわけか。枕木と枕木との空間に見えたものは、白い、しなやかな娘の脚ではない。スラックスだった。！　なんという期待はずれ。幻滅。鉄男は失望し、ぽかっと口をひらいたまま。

「ち、畜生」

三郎は、無意識に腰をうかしている。

「やつら、かんづきやがったな？」

「あ、いるいる！　今日もきてるわよ！」

娘たちの声が、頭上にせわしなくはずんで、三人の足なみがガードの上で乱れた。

「いい？」

「いいわよ！」

「それッ！」

娘の一人が、ひょいと線路上にかがみこんだと思ったとたん、枕木の隙間から、さあっと音をたてて、なにやら黒っぽいものが頭上いっぱいに散乱し、降りそそいだ。砂だ、ジャリをまじえた目つぶしの砂だ。新聞紙にでもつつんで、わざわざ用意してきたものらしい。

さすがの伊達男も、これにはかなわなかった。目も口も、ぽかっと無防備にひらいて、天上を見上げていたからたまらない。

「わわっ！」

三郎は、悲鳴とともにのけぞり、鉄男は、皮ジャンパーのすそをはしょって、あわてて頭をおおった。
うわっと、娘たちの歓声。拍手。枕木の上で、ひとしきりスラックスがとびはねる。
「ノッコ、見てみなよ、ほら、あの格好」
「おもしろい。殺虫剤かぶったゴキブリみたいじゃないの！」
「いいきび！」
「ノッコの作戦、まんまとあたったわね」
「そうよ、ゴキブリなんか、へのかっぱよ」
「あははは……うふふふ……」
煙のようにふりそそぐ砂ぼこりの上で、ひとしきり、娘たちの笑い声が爆発した。
鉄男は、皮ジャンパーをかぶり、尻まるだしの格好で、そそくさと、ガードの下から逃げだした。かれは、ジャンパーのすそから顔をつんだし、さもいまいましげにわめき散らしたものである。
「このイカポン女め、くそっ、おぼえてやがれ！　おれはな、いいか、おれは、〈ダンプの鉄〉といってな、このへんじゃ知る人ぞ知るちょっとした顔なんだ。畜生、なめるのも、いいかげんにしろい！」
「ゴキブリの鉄ね？　わかったわよ」
娘たちは、笑いながらそう皮肉った。
鉄男は、畜生、負けた——と思った。

2

このごろの娘には、ゆだんも隙もあったものではない。まさか、目つぶしの砂まで用意してこようとは、さすがの二人にも見ぬけなかった。三郎は、もろに砂をかぶった。しかめつらで、左目をごしごしとこする三郎を荷台にのせて、鉄男は、エネルギッシュに自転車のペタルをふむ。
ふたたび、急がなければならなかった。
すでに、八時五分前のサイレンが、そそりたつ煙突群の方角からひびき、鉄男の耳たぶをかすかにゆすっている。
あと五分以内に工場の門へとびこまなければ、タイム・カードに打刻される数字は、黒色から赤にかわって、月末の手取り分から、皆勤手当なるものの千円が、あっ

けなく消えていくのだ。わずか数分のおくれで、今月もまた皆勤手当を失うのは、ばからしい。その分を残業でかせぐには、十数時間という余分な労働が必要になるからだ。これでは、どう考えても計算がなりたたない。

「あわてずに急いでと……」

鉄男は、サドルからのしあがって、ぐうんぐうんと、自転車を走らせる。自転車の動きよりも先に、上体が、前へ前へとせりだす。風が両の頬でくだける。

やがて、ガラスの破片を、びっしりと隙なくうめこんだコンクリートの白塀が、鉄男の目のなかへとびこんできた。盗難よけとはいえ、いまごろこんな子どもだましの防備をそなえた工場は、東京の下町でもめずらしい。ぶあついコンクリートの塀の先に、山崎製作所のいかめしい鉄製門が見えた。その横に、従業員専用の通用門がある。

鉄男は、おやと目を見はった。

いつも、この時間には、押すな押すなでごったがえしているはずの場所が、今日にかぎって妙に風通しがいい。なにかあった——そう疑わずにはいられない。

二人は、自転車からとびおりた。

息せききって通用門をくぐり、守衛所の前へ走りこむと、奇妙なことにタイム・レコーダーがない。きのうまであったところから、いつのまにか消えている。先へとびこんだ三郎は、目標を失って棒だちになった。

「とうとう、やりやがったな」

始業時間を厳守するために、タイム・レコーダーを通用門から現場へうつすようなうわさはきいていたが、まさか、こんなに早く実行にうつされるとは思わなかった。鉄男は、小鼻をふくらませて、ふーっと、棒のような息を吐きだした。とたんに、八時のサイレンと、始業のベルが先を争うようにして、けたたましく鳴りだしたのである。

「ああ、鳴った。今月も、皆勤がパアだ」

と、三郎が歯ぎしりするのを、

「サブ、おたおたすんじゃねえよ」

鉄男は、一声あびせて、肩をふりふり、鼻息も荒く構内へむかった。

三郎が、そのあとにしたがう。

更衣室へむかう通路には、会社の掲示板があったが、そこは、なんだなんだとむらがる人なみで、完全に交通

が遮断されてしまっていた。掲示板には、緊急の通達事項があるらしい。鉄男は目をすえた。人垣は興奮でゆらいでいた。小さなざわめきはみるみるふくれあがっていって、トタンばりの天井にがあーんとはねかえる。ためいきもあれば、憤激もあった。しかし、べんとう箱をこわきにかかえた人なみにかくれてしまって、鉄男のところからでは、なにも見えない。

「よう、だれか読んできかせてくれい」

鉄男は、うしろからのびあがってさけんだ。

すると、しわがれた声が、

「ええ、本日より……」

と、独特のアクセントをつけてひびきだしたのである。

「タイム・レコーダーを、通用門より各工場入口に移動し、所定内労働時間の徹底をはかる……とよ。ええかね諸君、しからば明日より、着がえ、機械点検などは、すべて八時前に終了、始業のベルと同時に、すみやかに作業を開始されたい。ええかね、おわかりかな諸君？」

社長山崎大作の声色をまねて、尻上りに語尾をはねあげたのは、ボール盤の沢田八作だった。沢さんとよばれているが、所帯もちでもそのあけすけな性格から、機械場ではかなり人気のある男だ。

「わかったかときいておる」

沢田は念をおした。

「わからんね」

「なに、わからんと？」

「さっぱりね」

「以下御同様」

「わはは……」

ふざけた一同の笑いのなかに、こんどは沢田とは別な声がはさみこまれた。

「だれだ、八時二、三秒前にすっとんでくるやつは？」

「おれだ！」

と、鉄男がこともなげにいってのけたので、みな、どっとわいた。

「よし、いまのはわりかし卒直でよろしいぞ。——ええ、なおまた一つつけくわえるが、始業前に、用便などもさわやかにととのえられよ。就業時間中に、のんべんだらりと爆弾などおとしているような不心得者は、当社では出世できんぞ。ええかね？」

「ハ、すんまへん」

三郎の神妙な声に、また、どっと笑い声がはじけて、一同は、それをしおに更衣室へむかって流れだした。しかし、これは意識的にぶい動きであった。

時計はすでに八時をすぎている。それなのに、まだタイム・レコーダーの打刻は終っていない。みなは本能的にかけだしたい衝動をおさえて、でも、おれたちにだって多少の意地はあるんだぞとばかりに、ずるずると両足を交互にひきずって歩く。沢田の皮肉ではないが、八時寸前にとびこんでくるのは、鉄男と三郎だけではなかった。それは当の沢田をもふくめて、従業員三百名ばかりのこの工場の、実に半数近くにもなる。とうぜん八時の本鈴(ベル)が鳴っても、機械の動きはそろわない。こんなことは、去年の暮まではまったく見られなかった現象だった。

「会社のやつ、暮に出すもん出しておきゃ、こんなぶざまなことにはならなかったんだ。どうだ。みんな、こうなったら、マイペースでいくとしようぜ」

更衣室まできて、そのものズバリをいってのけたのは、平削盤(プレーナー)の馬場清次だった。

鉄男は、あ、畜生、やられたと思う。マイペースとは、うまいことをいう。馬場は、仕事の上でも一種のさえがあったが、こんなときにも、また〈ダンプの鉄〉の先をぬいていく。もっとも、馬場や沢田は、ともに所帯もちで育ちざかりの子どもをかかえているせいもあってか、いつも生活を土台にしたところでものをいう。だから、手がたいのだともいえる。それにくらべ、うちの兄きときたらどうだろう?

鉄男の思いは、ここでまたしても、兄の健一をとらえるのだ。

健一は、機械の虫か、さもなければ機械の一部品だ。そういってもいいすぎではあるまい。かれは毎朝、半時間も早めに工場へ出かけていって、のんびりと朝の一服を味わい精神を安定させ、始業のベルが鳴ったと同時に、機械のスイッチをいれる。健一はそれで〝気分よく〟仕事をしているつもりかもしれぬが、今朝のような不穏当なときにそれをやられては、会社の思うツボにはまる。これこそ会社の期待する労働者像だ。ましてや、一匹狼で知られた〈ダンプの鉄〉こと、このおれさまの顔は丸つぶれじゃねえかと、鉄男は、さも不快そうに唇をねじってはきだす。

「まったくもって、救いようがねえや」

「なんだ？」
三郎がふりかえった。
「いや、おめえとは関係ねえよ」
鉄男は、そういって、皮ジャンパーをぬいだ。
大みそかの銭湯みたいに、おびただしい肉体でひしめきあう更衣室には、明り窓一つない。ほこりまみれの裸電球が宙に浮いて、ハメ板にとめられたあやしげな写真に光をとどめている。だが、ここでは、みなが裸になるから、だれかれの見境なしに自由に話のできる気安さがあった。
「みんな、今日は一発、おれらの骨のあるところを見せてやろうじゃねえか。え？　おい。なあに、おれたちは正真正銘八時には工場の門をくぐったんだ。会社は勝手にタイム・レコーダーを移動したんだ。こんなことで〈皆勤〉が取れるものなら取ってみろってんだ」
ロッカーがわりの棚をはさんで、沢田が、鼻息の荒いところを見せれば、馬場はそうだと大きくうなずいて、
「いや、皆勤は、取れっこねえよ。そんなことしたら、いくらなんでも、みんながわっとさわぎだすさ。まあ、今日のところは大丈夫だ。どうせ、すぐに職制がなんかいってくるにきまってる。それまで、ここで一丁ねばってやるさ」
それから後は、憤まんいっぱいのみなの声が、それぞれ後をひきついで、更衣室はごったがえした。
「そうだ。なんでもかんでも、ヘエそうですか、てなもんじゃきりがねえもんな」
「まったく。うかうかしてりゃ、フンドシまで、ひんむかれちまうぜ」
「ふん、去年の暮なんざあ、そのフンドシまでぬかれかったじゃねえか」
「おーさ。なんともかんとも、ひでえつかれだったな暮は。機械をとめるな遊ばせるなで、昼めしもろくにのどに通さず、連日、十時十一時までの追いこみだったかんな」
「そこでだ……」
と、沢田が、にたり生ぐさい歯ぐきをむきだした。
「うちの山の神なんざあ、いいぐさがふるってるじゃねえか。〝おまえさんは、夜昼工場にささりこんで、夜なか、子どもをこせえにだけかえってくる〟とこきやがった」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.